

史実と史論の対話と相互補完の促進

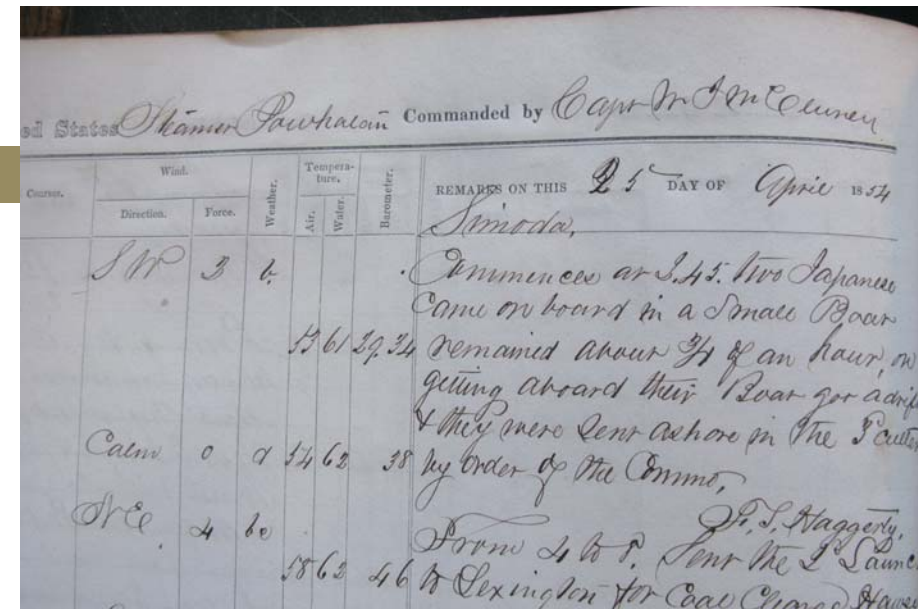
ペリーの旗艦に登った 松陰の「時間」に迫る

ポウハタン号の航海日誌に見た下田密航関連記事について

今年2月、文化交渉学教育研究拠点リーダーの陶徳民教授が、ワシントンDCのアメリカ国立公文書館が所蔵するペリーの旗艦の航海日誌の中から、吉田松陰の下田密航に関する重要な記事を見ました。これは下田密航の全容解明、および新しい松陰像の形成にとって重要な意味をもつ発見です。この記事により明かされた時間的史実や松陰像について、陶教授に語ってもらいました。



吉田松陰
写真提供：毎日新聞社



ポウハタン号の航海日誌第2巻 1854年4月25日のページ



ペリー 東インド艦隊司令長官
写真提供：毎日新聞社



文化交渉学教育研究拠点リーダー
陶徳民教授

「時間をめぐる異文化交渉の視点から開国史を再考する新たな研究のきっかけになることを期待したい」

●吉田松陰の下田密航に関する記事を発見

今年2月9日、アメリカ国立公文書館で海軍省関係のアーカイブに関する調査を行い、ペリーの旗艦ポウハタン号の航海日誌第2巻(1853年9月11日-1854年9月7日)1854年4月25日のページから、吉田松陰の下田密航に関する記事を見つけました。記載者はポウハタン号の艦長W. J. マクルーニー大佐であり、記載内容と私の日本語訳は次の通りです。

Remarks of This 25 Day of April 1854
Shimoda

Commences at 2.45 two Japanese came on board by a small boat, remained about 3/4 of an hour, on getting aboard their boat got adrift & they were sent ashore in the S'

(Steamer's) cutter by order of the Commo.(Commodore).※
※括弧中の内容は括弧直前の略式表現を解説した結果

下田
(午前)2時45分、二人の日本人が小船で乗艦してきて、約45分間滞留した。乗艦した際、彼らの小船が漂流したため、提督の指示で本艦の小艇で岸辺へ送還された。

下田密航の際、松陰とその従者、金子重輔がいつペリーの旗艦に登り、どのくらい艦上に滞留して送還されたのかは、長い間謎でした。この記述は、何時何分という細部まで確定できる非常に貴重な史料です。

●日米間の異なる時制や時間観念について

現代の感覚なら、西暦4月25日未明に起きたこの事件を和暦で記載する場合、3月28日のことになるはずだが、しかし、密航失敗後の松陰は『回顧録』でそれを「三月二十七日夜」の行動として記録しました。江戸時代では一般的に午前零時ではなく、夜明けをもって一日の始まりとしていたからです(午前零時をもって日の変わり目とする習慣は1873年元日をもって太陽暦が採用され、一日を24時間に分割する定時法が施行されてから次第に根付いていったという)。それだけでなく、昼夜それぞれを六等分する不定時法を使っていた当時の日本では、一単位時間(「一時」=平均的には2時間前後)の長さも西洋と違うし、しかも季節によって変動していました。とは言え、時間観念の厳密化につれて、「一時」に対して、「半時」(=1時間)、「四半時」(=30分)というような表現も生まれました。

上記した密航の二日前の4月23日未明に、二人も「鮑厦旦船」(ポウハタン号)を狙って密航を図りました。「武山の海岸に露坐し、夜八ツ時に至る。夷船中時鐘を打つ。彼れの一時は

吾の半時、故に是を以て時を知ることを得」という日記を見れば、松陰は日米間の時制の違いをはっきりと認識していたことがわかる。また、4月25日未明の旗艦上の一場面として、「時に鐘を打つ、凡そ夷船中、夜は時の鐘を打つ。余曰く、日本の何時ぞ、ウリヤムス指を屈して此れを計る。然れども答詞詳かならず(割注：此の鐘は七ツ時なるべし)」と記し、ペリーの首席通訳官S.W. ウィリアムズの尋問を受け、やりとりが最終段階に入ろうとした時間を「七ツ時」と推定しました。

1854年4月25日下田における「日の出」時間で計算すると、「七ツ時」の始まりが約3時14分になります。とすれば、松陰が野山獄で書いた『回顧録』における記述は、3時30分に送還されたというマクルーニー艦長の記載と合致しています。このことから、少年時代より萩藩の兵学師範(軍事教官)として育てられ、江戸において蘭学の師、佐久間象山の薫陶も受けた松陰の厳格な時間観念と優れた記憶力が裏付けられたと言えるでしょう。

●松陰の「知の冒険」を通じ、現代の若者へ

下田密航事件は、日米和親条約締結の24日後に起こりました。幕府との信頼関係が損なわれるおそれがあるため、ペリーは松陰を連れていくことができませんでした。松陰の知的好奇心を非常に高く評価し、このような若者がいるのなら、将来、日本は先進国への仲間入りがきつと実現できるだろうと述べています。当時、松陰は25歳未満。脱藩遊学で武士の身分と俸禄を失っており、密航に成功し、海外で勉強して戻って国に役立つことができれば、地位も俸禄も回復できるという希望もありました。松陰の「知の冒険」—鎖国の禁令を犯してまで海外密航を敢行した勇気を知ることが、今の若者への刺激となるだろうと思います。裕福な現代社会の中、若者たちにはこの好条件をもっと活かし、より高い目的を持ち、自己形成をし、松陰のように己の探求したいことに全力投球して欲しいのです。



ペリーの旗艦ポウハタン号 写真提供：毎日新聞社

●史実と史論の対話

松陰は、伊藤博文や山県有朋など近代日本の創始者たちの師としても注目される国民的英雄であり、彼に関する研究の目録自体が一冊の本になっているほど膨大で、そこに新しい知見を加えるのは非常に難しいことです。しかし、今回の発見が示しているように、視野を海外に残存する関連史料に広げれば、新しい知見の獲得は決して不可能ではありません。要するに、「日本」の歴史は最初から「外部」との不断の接触の中で形成されているものであり、近代「開国期」の歴史は特にそうなのです。海外で「日本」を再発見するというアプローチがこれからの日本史研究の一つの方向になれるかもしれません。そして、場合によっては、今まで見逃されてきた重大な史実の発見が、従来の歴史理論や概括への修正を迫るということもあり得ます。だからこそ、史実と史論の対話が重要であり、その相互補完を促進する立場で研究を続けていくことが歴史家の責任であります。